

(表紙)

明治四十一年

日誌

青年寄宿舍

(中表紙)

明治四十一年

日誌

青年寄宿舍

文芸部

明治四十一年

正月元旦 郷心新歳切 天畔独潜然 老至居人下 春帰在客先 と古の詩人も歌ふて居るが、我等も一度郷里を辞して笈を北海に負ふてより未だ帰郷せざるもあるに又もや茲に春を迎ふる事となった。今更ながら実に日月の神速なるに恐〔驚〕ろくのである、さるにても御正月は目出度きものだ、何だか雑煮など喰べると何となく改まった様な目出度い気がするのである。委員諸君が早く起きて餅焼きをなし、七時には一同食堂に会食したが皆々満腹の様子であった。其れより九時少し前に登校して中学も大学も共に新年拝賀式があり、終りて各人其々知人の宅などへ年始へ行かれた。天気は今日は珍らしきばかりに晴れ渡り、回礼の人々の顔も何だか元気なり、夜には新聞室に席を敷きてストーブを囲みてジャンケンやクロッケノーや色々と愉快地に遊び又、話し合ふて九時頃までは全く笑声が絶えなかった。亦此の様な面白ろさがあるか？

一月二日 今朝ハ初荷で各店は大に賑はしかったそうだ。

朝の食事は八時で、志るこである。一年一度なれば皆々大に食ふた。中々の豪の者もあった様子である。昨日より今日などは、年始にて外出して舎に居る者は極めて少数で淋しい程なり、夜食は早くなし、五時少し前に宮部先生宅に行った。先つ例年の通り写真を見せられたが種々様々なる珍しきものが沢山あり、殊に先生の若年の頃や学生時代のものなど、興味深く感ぜられしが、先生に於ても転た懐旧の情を引き起さるゝ事であろう。七時頃よりトランプは別室（書齋）にて又、クロッケノー、英字作り、電信などなど色々な遊戯を笑顔の間になしたり、其等の間に茶菓や蜜柑などの果物など沢山に馳走になりたり。

十二時頃に「すし」が出でて食し終りて再び「雷様」や「陸！海！空気」などの遊戯を一同にてなせしが、先生には、絶えず生等と遊びを共にされて些の隔てなく大層に愉快気ニ吾等を歓待されて世界の学者たる先生が斯くまでに我々舎生を愛さるゝには今更ながら感謝に堪えないのである。名残は尽きねど夜もふけぬれば帰舎して一時頃、床に入る。吾等にとって、年中最大快樂の一日で今夜の夢はさぞや満足ならん？！

近日スケーチング盛んなり、在舎生も半分は、日々に熱心にやって居らるゝなり。

一月三日 昨夜遅かりし故今朝は中々諸君が起床せず、御雑煮あり、朝より晩まで年始やスケートにて前二日の如く余り寄宿舎に残らるゝ者少なし、今年は北海の吹雪国に珍しき晴天の御正月にて本日も亦前の二日の如く好天気にて日中太陽の直射する処は中々暖し、但し夜と朝は可なり寒し。

一月四日 昨日までの好天気引き更へて、今日は吹雪がありたり余り寒からず。年賀の祝ひの名刺を受けし人名は左の如し。

早坂清吉君（北五、西十一）、斉藤徳太郎殿、上野毫太殿、丹羽八郎殿、高松正信殿、村上雄之助殿、新保大吉郎殿、徳田義信殿、朝倉金彦殿、谷藤正太郎殿、山中道一殿、石沢達夫殿、森田健次郎殿、鈴木簡一郎殿、工藤蔵之助殿、市橋宥（北海道庁事業口）、速見亨殿、今井政殿、■荒物雑貨伊藤幸一郎殿（北五、西十二）、■岡本善蔵殿（北三、東五）、堤いね（堤支店 大通西六）、■藤樫憲義（北三、西四たたみや）

一月五日 本日も好天気にて稍暖なり、午後三時に寒林第三号（新年号）は明治四十一年の春と共ニ久しき休刊より再び出ず、美麗なる絵が数枚ありて非常に立派なり。編纂人池上君の労や謝するに余りあり。

万朝、読売共に正午頃元旦号が到る。又年賀状も多く本日到る。

一月六日 今夜福永君帰舎せらる。母様も大分良きとなり。

一月七日 雲少なく非常なる晴天にて夜に入りて迄も暖なり。氷少し溶けたり。

角野君今朝帰舎せられ、夜飯より食す。

本年の正月最後の雑煮あり、八時に一同会して名残なき迄に十分食ひたり。

今迄にて本日は最多数の年賀状来たれり。

一月八日 今日より農学も中学も学期初まる、門限も元の如く九時となり夜も中々静まりかひりて勉強しつゝある。昨日より小寒となりしに反って暖なり、朝八時半頃屋外が甘

四度なり。

一月九日 今日も晴天で大層に暖なり。

一月十日 今日も稀有の晴天にて朝夕は中々寒気厳烈なり、朝の八時に華氏の二度にて今冬に入つての朝に於て最下点なり、夜に入つては、風全く無く天清く月澄み、星光爛々、天文学者の喜ぶ夜にやあらん。見よ！カシオペヤ星座は吾人の頂点に輝きつゝあり。

一月十一日 山下太郎君今夕方に退舎されたり。

本日も晴天にて夕景は中々に見捨て難し。霞か雲か知らねども西山一帯は灰白にて晴れし空と山とのストラクトな境界線のあたりは夕照に赤色に曉鴉鳴きて埒に帰り、千古のエルム毅然として白雲の上に立ち、風無ければ枝動揺せず、死せるが如きも「春に芽を出すエルムみや」。

一月十二日 非常に暖気にて終日火を要せざる程なり、雨様もさい降る。

現在々舎生左の如し

古賀君鈴木君、野津君角野君、石津君三田村君、曲尾君前川君、別宮君、和田君金子君、池上君小野崎君、田中君松前君、近藤君添田君、中村君松本君、能沢君福永君、江原君丹治君

本朝、小野崎君帰舎せらる、廿日の間故郷へかあちゃんの御乳を戴きたる為め大分に大きくなってこられた、とは誰やらの評言！

本日より別宮君火鉢を使用さる。

一月十七日 第二回の暗誦会ハ演説会を兼ねて此夜開かる事となつた。本年に入りて、初めての会で実ハ明日の筈なりしが、不都合の者ありたれば、今夜開かれた。

正六時に開会、池上会長の辞ありて、順次に殆ど過半数の人々が英語、独逸〔語〕の暗誦や又ハ面白き御はなし、演説などあり、或は流伸〔暢〕に、或は滑稽に、或は勢力あるもの、教訓的なるものあり、実に稀に見る盛会であつた。七時半頃閉会、会長と会員の熱心によりて斯く盛大にいたつたので昨年末のと比ぶると、一段の進歩が明かに見ゆる誠に末頼もしき事である。又其の有益なる事は、言はずもがな、乞ひ願はくは、今後、益々盛大ならん事を。

今日は、非常なる寒気で、寒気凜烈とは、此の事ならん。

一月十八日 本日も中々寒し、夜は余り甚だしからず、ストーブを新聞室にたきて之を囲みて快談す、厳寒夜話の情味は真に吾が北海道に於てのみ之を見るなり矣。

旧十二月十五日の月、誠に美なり、夜深かしして賞せる風流漢もありし。

一月十九日 本日は日曜にて雪降りて可なり積む。

札幌中学の勇しき雪戦会あり、多くの者見に行く。

一月廿一日 夕方四時半より三十分間、本月の月次会、其他二三に就きて委員会を開く

一月廿三日 柳川君本日より火鉢を用ひず。

一月廿五日 本日は第四土曜日で月次会があつた。委員ハ中村君、野津君、小野崎君、能沢君の四名、例の如く午後ハ豚飯の肉切りで忙はしかりし。

六時過ぎに皆満腹の姿にて会合した。先、野津君の開会の辞あり、続いて弁士として登壇せるは、別宮君は人間は大抱負を懐くべきもの、添田君は、人間は安心立命の礎を樹つべし、田中君は真の自由、松本君は林業を論じて我田引水の大気焔、之に対し能沢君は水産業につきて長き々々議論をなし、池上君は万物冬尚枯死せるゝあらず、大なる潜勢力を養育しつゝあるを諸君知らずや、注意して此等を研究すべし、和田君は風変りにもレクチャー然とボードを掲げチョークを持して関〔簡〕単なる太陽の事を述べらる。最後に柳川君登壇、吾人は如何にして堅固なる決心を為し得るや、との題下に、一ツは固束の天性に由る者あり、他ハ然らざるもの、而して後者の元因〔原因〕二ツあり、身体の健全及び興味の二なる事を述説せらる、今日は弁士の用意が不意なるにも拘らずして中々盛大なり。

たゞ残念なりしは、吾等の父とも母とも懐ぶ宮部先生の御出席せられざりしを!!直ちに茶菓に移る、甘党のせん餅を主にかじるるあり、蜜柑を得意とするあり、茶をガブガブ飲むあり、火鉢を囲みて楽しむ様、外面の吹雪寒きは露知らぬぞ、いとゆかしき哉。最後に数多の遊戯ハ余興として演ぜらる。ジャンケン……ボ!や銭廻はしや、シャンシャン!や、最後に最も愉快なりしは名指しなり、実に面白く止み難けれども、時刻も過ぎて十一時となりたれば、各々楽しき夢にぞ入りける!

一月廿八日 本日夜、札幌独立教会の廿五年祭あり中々盛大に立派に出来たりし。

一月廿九日 今夜予科一年の山田桂輔君入舎、食事はせられず、在舎諸君如左。

古賀君鈴木君、角野君山田君、三田村君石津君、曲尾君前川君、別宮君能沢君、和田君金子君、池上君小野崎君、松前君田中君、近藤君添田君、丹治君江原君、中村君松本君、野津君福永君、柳川副舎長。

即ち満員廿五名なり、盛んなりと謂ひつべし。

一月三十日(木曜日) 本日は孝明天皇祭にて各学校共に休業、楽しき一日を送る。天気晴朗にして風無く非常に暖にて日中も夜も火鉢を要せず、外套も用ひずして可なり、一月分会計決算をなす。先月の如く高価ならばと心配して取りかゝりしに大分に安価に結果す。食費は七円九十三銭なりき、之に舎費一円、文芸運動部費十五銭、炭を使用せる者ハ其代八十二銭なりき。

二月五日 今朝鈴木限三君冬期休業の帰省より帰らる。兎二角ニドーモ中々以て御ゆつくりであった。定めし愉快なる故郷の御正月を味ふた事だらう。

二月六日 近頃一週間計リハ降雪も吹雪もなく大層にでもないが余り寒からず、積雪は三四尺なり。

二月八日 新聞競売をなす、結果左の如し。

北海タイムス	池上君(七銭)	○
万朝報	和田君(十銭)	○
読売新聞	江原君(十四銭五リ)	○
中学世界	鈴木君(八銭)	

二月十日 今夜第三回の暗誦会演説会が開かれた。六時に正しく池上委員によって簡単な開会の辞を述べられ、統えて十数名の演者があつた。中々盛んであつた。次回よりはモルガン氏をへいする事となしたり。

二月十三日 第八号の田中君松前君ハ本日よりストーブを止めて火鉢を使用する。近頃ハ大層に暖になりたり、北海の厳寒も今や逃げ走らんとし暖かな春が歓迎さるゝらん。

二月廿日 本日ハ一点の雲もなく、まことにのどかなる日和なり。

二月廿一日 本日も太陽東の平野に登りて、西山に没するまで大層に暖に雪も数日来、溶けつゝあり、正午ニハ五十二度を示す。

学校に行きても皆々浮き立つやうな気軽の様子ぞ見えたる。

本日より五号の別宮君能沢君が火鉢を使用せず。

二月廿二日 第二月の月次会今夜開かる。委員ハ鈴木君、添田君、田中君、丹治の四名なり、六時半に開会の辞は鈴木君述べらる、小野崎君、丹治、石津君の演説あり、宮部先生も来たられ、先生のマッカリヌブリ其の他の登山談は実に面白かりき、有島先生其の内に来会せられし故に直ちに談を承はる。先生ハ米国ハーバードホールカレッジ学生寄宿舎生の年中行事は非常に面白く美しくも感ぜらる、斯くて小田切農学士も厚意にて来会せらる。同氏は農学校第十期卒業生の由、同氏の学生時代宮部先生宅に食客たりし時代の禁酒失敗談や以後今日までの禁酒と禁煙の経験談やあり、十時に正式の会終り、茶菓出て膝を交へて座談に移る。様々なる面白き談や、有益なる話やあり、又不可思議なる九星の事や運命予知法などあり、先生方帰られてより数番の余興ありて十二時近くに散会す。弁舌者の少なからんと思ひしに此等の諸先生来会して演説をなし下されしは実に深く感謝する処たり、為めに非常の愉快なる一夜を得たり。

二月二十八日 本日始めて車の付きたる真個の人力車を見る。

今夜九時頃より十一時頃まで二月分合計(先月廿九日——本月廿六日まで)切算をなす。

又大分に多額となり食費九円二十銭余炭代ハ五十九銭ばかり。

二月廿九日 在舎生如左

柳川君

鈴木君、角野君、石津君、曲尾君、別宮君、古賀君、山田君、三田村君、前川君、能沢君、金子君、池上君、松前君、近藤君、江原君、和田君、小野崎君、田中君、添田君、丹治、松本君、野津君、中村君、福永君

三月五日 早や三月桜花の候なるべきを、北海の地は白き春雨降りしきり、今日も一尺も積もりぬ。

三月七日 中学、農学共に試験近づき、舎生諸君も燈火いと親しめる様なり。

三月九日 昨朝来、本日夜に入りて迄で非常なる猛烈の吹雪荒れまはり、雪も積む事甚だしく、諸車の通行も、吾等の歩行も大に困難に、馬、橇も通行少なく、汽車は各地に於き立往生などもあり、為めに全列車不通となり、小樽に赴きし、遠藤新博士も吉報の発

表になりし昨日、今日吾等生徒も祝言申上ぐるすべもなし、呵々、兎も角も北海道に於ても稀有の荒れなんめり。

三月十二日 九日の吹雪去りしと思ひしに、昨夜来本日も午後三時頃まで非常なる猛烈なる大吹雪あり、我寄宿舎は物置小屋賄部屋の北面ハ屋根まで積雪つゞき、十二号室と風呂場ハ雪窓外を閉ざして昼猶ほ暗黒なり、一号室より六号室までの窓前にも積雪多く、窓の半ば没す。

学校まで行く途中は実に積雪深く一足ごとに腰部まで否、全身を没し、はふて行きし者もあり、約廿分もかゝりて登校す、欠席者半数以上多くのクラスは休業となる。札幌全市も雪に没し、道路を歩むも両側の家見えざる程積雪あり、鉄道は全く雪に没して汽車通らず、各地に汽車の立往生や家屋の壊倒、死人などあり、新聞、手紙なども来たらず、二十年来の大雪大荒れなりしと。

三月十三日 兩三日来たらざりし新聞来たる、郵便物は未だ全く来たらず。

三月十六日 数日来見るを得ざりし東京新聞今日漸やく深山〔夜?〕に到着し読むに堪えず、郵便物も着す。

三月某日 新聞競売左の如し

万朝報 (三月分)	八錢五リ	曲尾君
タイムス (〃)	七錢	三田村君〇
読売 (〃)	十二錢五リ	中村君〇
中学世界 (二月分)	九錢	添田君〇

三月十八日 本日より農学校の第二学期試験開始す、皆々大に勉強しつゝあり、終夜燈火絶えず。

本日まで第四号室(曲尾君、前川君)火鉢を使用を止む。

三月廿日 中学は本日学年試験終つて楽しからん、直ちに角野君は今夕刻小躍りしつゝ沙〔砂〕川なる家郷に帰省の途に登らる。

三田村君ハ今回卒業にて今日此頃は送別会やら歓迎会やらで多忙に又最も楽しき時なんめれ。

三月廿一日 雪は未だ深きも北風は又寒きも早や彼岸の時節となれり、東都などに皇礼祭の旭旗に相對して桜蕾の淡紅も見え、間々開けるもあるなるべし。

農学校の方は試験最中の二日の休暇を得て一ト息つけるなり。

三月廿二日 本日は日曜にて天気晴朗に日は暖なり。

三月廿三日 本日限り九号室の近藤君、添田君火鉢使用を止めたり。

三月廿五日 近日は非常に好天気なり、さしも深き雪も見間に溶けて少なくなれり、本朝早く江原愛作君が歌棄の海辺に「にしん」漁見がてらに旅行に出発せらる。

農学校は本日試験も総て終結、皆は明日よりスプリングバケーションを得る事となれり。夕方委員会を開きて月次会其他に関して相談ありたり。

池上君小野君(六号)は本日限り火鉢を止む。

三月廿七日 北海の地尚白雪消えねど春色野に充ち、日は暖に南風將にエルム樹の芽を發せしめ、クロバーは雪下に五分の新葉見ゆるに到らんとす、雪溶くる事著るし、張敬忠の辺詞に曰く、

五原春色旧来遅 二月垂楊未掛絲  
即今河畔氷開日 正是長安花落時

実に北海の地ハ

石狩原頭春來遅 二月榆樹未出芽  
即今河畔氷開日 正是墨堤花雨時

三月廿八日 第三月の月次会と兼ねて三田村君の中学卒業の祝賀送別会が開かれたり。

池上君司会にて和田君、山田君、別宮君が委員たり、六時半に開会、開会之辞、次いで鈴木君の三田村君を祝う詞、野津君の「大なる生活」、柳川君の所感と「長寿」との演説、宮部先生の「クラーク先生のエネルギーチックライフ」は面白く、石沢学士の「吹雪と健〔堅?〕忍の氣象」は実に有益に心強く聞かれたり、委員の改撰あり、

常務委員

池上君 十票  
野津君 九票  
山田君 七票  
石津君 六票

園芸委員

曲尾君 十四票

運動委員

角野君 八票  
別宮君 六票

次いで茶菓の饗あり、林檎も出ず、楽しく飲み且食ふ、宮部、石沢両氏帰らる、雑談をなし、錢廻はしを数回なし、名指しをなす。大に々々興に入りてたゞく事も、盛んに、非常に愉快の中に十一時に閉会、其々床に就く。

興は特に福引があつた。中々面白ろく、中に就いて最も笑はせたのは、寄宿舎の名物男、第一別宮君一大食（大茶碗）

第二池上君一小男（九谷焼の福助）

第三金子君一大男（ロングフェロー 枝）

三月廿九日 第三号（石津君、三田村君）にて火鉢使用。

三月卅日 第一号（古賀君、鈴木君）にて火鉢使用。

本日午前には本月の会計切〔決〕算をなした。所が食費ハ七円八十錢余にて先月に比して大層に安価である。文芸運動部費ハ廿錢である。

四月一日 文芸部委員に選ばれて日誌の記帳を仰せつかった。自分の様なものをも用ゐて

此の青年寄宿舎の参政に与らせ玉ふ、自分の光栄も一入大なるものがある。我が寄宿舎ハ理想的でない、改良すべき所ハまだ中々多い。心を一にし歩調を一にし、尚一層向上して尤も麗はしき春風吹き温き家庭的寄宿舎に進るに及ばずながら此委員と云ふ末席を瀆して務むることハ自分の切なる願である。此のため吾人ハ利己的なるを許さない、只一人食って寝さへすれば充分である様な考ハ許さない。先づ第一に上下意志の疎通を計らなければならぬ、いでや進まん、吾人の旗印を明にして理想の彼岸に。

昨年九月来舎生として親しく交はりし野津君、古賀君が退舎された。兄弟として朝夕を共にせし此の二君を我が舎より失ふことハ名残惜しく感ずる所である。

四月二日 朝委員会が開かれ、ピンポンを遊ぶ時間と、各自に室を訪問して遊ぶ時間の制限が相談された。又柳川君より我が青年寄宿舎のある所、又退舎に關する注意とを語られた。

学僕として働かれし福永君退舎し、その後任として本間君が入舎して学僕として働かるゝ様になった。〔欄外に「野津君退舎せられしゆへ、小野崎君その後任として食事委員〇〇〇〇〇」とある〕

四月三日 此の休暇を利用して定山溪遠足を企てた。

朝まだき六時半と云ふに一行十四名軽装をとゝのへて舎を出でぬ。エルムの森の木陰よりハ我等が此の行を祝すべく又護るべく太陽がさし出でぬ。始めは皆揃って出でも段々と離れ々々となった。行く道の傍の景色の美しさに元気よく御料の橋までついた。茲で携へ来りし弁当を食った。時八十時半頃であつたと思ふ。それから疲れたる足を曳きづりつゝ、先鋒隊ハ十二時半に定山溪についた。着くや否や、旅装を脱ぐや遅しと温泉に飛び入りぬ。その時の心地よさ、それから暫らくして四時過ぎ夕食にとりかゝりぬ。此の遠足にハ各自米一升と玉葱と芋とを携へたゆへ、食事ハ委員を作つてその人々の手により豚汁が出来たのであつた。晩ハ又一入の趣味が深かつた、火鉢の廻りに座して名指しをやり、又カルタを遊び、菓子を食ひつゝ、絶へざる清話に耽るなど定山溪の狭苦しき旅店の一室にて楽しき一夜を経験しぬ。皆が床を并べて眠つたときハ、彼方でも、此方でも愉快な話や滑稽な事などで笑ひながらいつしか長き旅の疲れにて深く寝入りぬ。

今日の炊事委員柳川君、松本君、丹治君

四月四日 定山溪の朝の景色、それこそミュージズの神の御助けによってこそかゝる雄大なる有様ハ筆にこそかけめ、我等が拙き筆もて云も、破るを憐るがまゝに書かざるにまさらむ、朝飯を食つて雪滑りをなしぬ、朝ハ堅雪とて上より滑る時の心地よさ、始めてなした事とて面白く思ひき、早昼を食ひ十一時半過ぎて定山溪を出發した。昔ながらの山奥に潜める定山溪よ、汝の莊嚴なる自然を永へに保て、文明と云ふ悪魔の潮流へ汝の潔白なるを破らざらしめよ、我に一日の快を与へし汝、吾ハ今汝と別れんとす、定山溪よ、いざさらば、と。

朝の炊事委員、池上君、野沢君、別宮君、仲尾君

昼の炊事委員、添田君、和田君、山田君、小野崎君、石津君。



途中水力電気ノ発電所により中の器械の動ける様を見た。廻れる機械の音の軋れるに耳を破られる様に感じて早速其処を立ち出でぬ、帰路ハ或る一隊ハ真駒内により、或る一隊ハ元来し道をとりにて無事札幌へついて、その晩ハ心地よく自分の寢床にて眠った。

一行に加はりしもの、柳川君、山田君、三田村君、石津君、曲尾君、別宮君、能沢君、和田君、金子君、池上君、小野崎君、添田君、丹治君、松本君。

近藤君ハ此の中に加はらずして個人として定山溪へ行かれた。

此の中、金子君、添田君、三田村君ハ此の日の一行と帰路を共にせずして尚滞在せられた。

極めて短き旅行なりしも互に親しく語り、打ち解けて交る事が出来て尚一層親しみの度を増した様に感じた。

此の旅行の会計の報告を茲に転載して見やう。

豚	一円六十二銭五厘
砂糖	二十三銭
菓子	一円 五銭 (十五人分)
宿賃	三円 八銭
蒲団	三十五銭
味噌	十五銭
合計	六円四十八銭五厘

そして各自此の旅行に加わった人から二十銭づゝを徴収した。

四月五日 今朝朝四時から昨日の御疲れにも拘らず柳川君、別宮君、曲尾君、松前君の四君ハ藻岩へ雪滑りに赴かれた。中々元気があるものだ。

晩に近藤、金子、添田、三田村の四君ハ定山溪から御帰り遊ばした。

[欄外に「四月六日、田中貫一郎君退院せらる」とある。]

四月七日 柳川副舎長よりなるべく他人の室を訪問して長話して他人を妨害することのなき様にと注意が掲示された。

新聞競売左の如し

北海タイムス	七銭	添田君
読 売	十銭	和田君
万 朝	七銭	別宮君

これまで購読し来りし中学世界の代りに何か他の雑誌を講読することにつき投標を募りし所、その中多きものハ太陽、日本及日本人、中央公論なりき。

四月八日 農科大学、中学校ハ学期が新になり又、学年が新しくなった。中学の諸君ハ一級上の級に進まれたので得意なり。

寒林四号発行された。中々上出来、投稿者の御健筆と委員の御骨折とを感謝す。

裏のテニスコートの雪掻きをした。何れ解けるものを御苦勞にも雪をすてるハ又テニス狂なるかな。

角野君昨夕帰舎せられたり。

四月十日 長く舎にあって老成人の如き年少者松前君ハ東京のある中学に転校せらるため退舎せらるゝ事となった。午後三時半より食堂に於て送別会を開く、池上君、柳川君、鈴木君、別宮君、田中君の送別の辞、松前君の答辞あり後で煎餅を食ふ。

六時半頃の汽車にて出発せらしゆへ、舎生皆君を停車場に送る。

二年間此の札幌の明媚なる自然に食ぐくまれ、又此の寄宿舍にありて養成せられたるその主義を逞〔飽〕くまで続けん、以て君が成功の前途を祈る。

四月十一日 能沢君退舎せらる。茲にあって共に兄弟たりし人の退舎するハ何となく長く縁を別つ様の気かして、なつかし。

道路の雪ハ殆んど全くとけて去りて堅く冬の吹雪の代りに吹塵を見るに至りぬ、吹く風の身にしむ心地も春を伝へたるものゝ如くにして福寿草ハ又もや此の春の先駆者となりぬ。

**The south wind wanders from field to forest and softly whispers, "The Spring is here"** —Brgant.

四月十二日 春の空閑な今頃此の頃ハまるで復活した様である。復活の曙光もあたゝかに照り出でぬ。

植物園の中でテニスも出来た、テニス狂の腕も嘸かし鳴って事であらう。

此の寄宿舍にあって我等の兄として朝夕を共にせられし鈴木限三君ハ退舎せられた。

此の二三日引き続きて舎生の退舎せられて舎内ハ何となく淋しくなつて晩等ハ人が居ない様である。

食事委員之れまで一人なりしも、三人として購買その他色々活動すべく決しぬ。

四月十三日 出る人許り多くて困つて居たが、札中一年生新妻胤宗君が入舎された。

四月十六日 今朝江原君が帰舎された。永々方々を漂流しても相変らず元気がよい。

四月十五日 松本君林学実習のため苫小牧演習林へ赴かれた。三週間森林生活をせらるゝと云ふ。

四月十九日 今日は基督教の方から云へば復活祭である。

吾人の復活の生活を始めるべきスターチングポイントである。春の暖かき南風もエルムの梢を訪れた。牧草も萌え出でんとしてをる、ミューズの神の美つくしき行列も近づいてきた。天地悠長万物生きた春の日である。

テニスも中々盛んである。

新妻君ハ昨日小樽に家庭を問はれ、今晚帰られた。始めて一人父母の膝下を離れて無趣味な寄宿に送らるゝは、御淋しきことゝ御察し申す。

四月二十日 今日夕食後委員会あり、相談した事ハ次の月次会の事、運動部のテニスの件及その他に渡つた。

金子君今夕小樽に渡つた。

四月二十一日 丁度約一年間舎生として我々と朝夕を共にせられし、江原君今度中学を止

め、岩見沢農学校に入学せらるゝことゝなつて今日一先づ退舎され、明朝早く札幌を出発せらるゝ筈になつてをる。中学を半途退学して岩見沢に赴かるゝのハ何だか非常に残念である様だけれども、君にハ外に尚考があることゝ思ふから敢て止めハしない、寧ろ今のときになつてハ心よく君を送るあるのみ。

寄宿舎も余程少なくなつた一ヶ月前までハ晩でも舎内騒々しくて時々ノックも頂戴して居たのに今になつてノックどころか、余り静かで寂莫を感ずる位である。人が少ないので月末の決算に影響せんと心配してをる。

四月二十二日 江原君岩見沢に向つて出発せられたり。

金子君帰舎せらる。

四月二十三日 三田村君苦前の慈母の膝下に帰る。

四月二十四日 月次会あり、舎生が急に減じた後に開いた事故集るものが少なくて非常にいつも異つて忙しかった。弁士は山田君、添田君、近藤君、石津君、柳川君ハゲーテの例にひき時間を有用に用ふべしと云ふことであつた。又久し振りで森本先生が御多忙中にも拘らず御来会下され有益なる御話があつた。自分ハ近頃實際的に凡てをなさんと思ひ、如何なる時にも正直であること、自分で自分を欺くことがあつてはいかぬ、彼之一時間面白く話された。後で賄、運動部、文芸部の相談があつた。運動部のラケットの購買に関してその費用の徴収のことに關し、又文芸部の十錢を集めし中夏期中だけ運動部に多くを与へ文芸部ハ活動せず、冬期大いに活動することゝなつた。そして新聞をタイムスと、万朝と、読売とし、雑誌を矢張り中学世界を取るゝなつた。互に議論百出、舌の大戦場と化しにけり。

四月二十六日 今日は日曜日である。折角の今日も午后から雨が降つた。中々退屈な人もあつた。

ラケット三本七円にて求めた。

四月二十九日 面白くもない会計決算をなしぬ。一ヶ月七円七十錢五厘となつてをる。

ま一之なら近頃の物価に応じて高くもない、安くもあるまい。

四月三十日 此の月になつて急に舎生が減少して淋しく。なつた。目下舎生は十八名なり。

五月四日 熊本県人高樹亮君、予科受験の目的を以て入舎されぬ。

五月 日 バーヤが一ヶ月間許りの休養を申込んで来たことについて委員会が開かれた、先頃より賄委員を三名にしてこれまでのバーヤ職種を侵害したのでバーヤ君大いに感情を害した、実ハこのことハ決してバーヤを悪み、バーヤを疑つてしたのではなく、毎月の費用が高くなり、学生として負担に堪えぬから改言〔善〕せなければならぬと思ひ、かくハ委員会に決めて実行したのである。所が無学な老いて一種偏屈なバーヤには之のことが非常に気に食はなくて自分が疑はれてをる、自分が不正なことでもしてをると見られてをるのでハないかと思ふて数日来愚痴をこぼし非常に扭〔拮〕れて来た。勿論之のことハバーヤにのみ罪を帰せるものでハない。バーヤハ何も解らないのである。モー

少し始めからバーヤをよく解る様に取り扱ったならばよからしものと思ふ。又バーヤは一二年來老衰の結果、体が弱り、烈しき労働に堪へぬ様になってをることハ確かだ。然し今バーヤが一ヶ月許り暇を呉れ、後任ハ此方で探してくれと云ってきたが、之ハバーヤとしてとるべきことハ万々ない、暇がほしければ、その間後任者を自分で求めて来る筈である、何だか恩返しノストライキノ様である。

バーヤが居なければ、二十余名ノ舎生ハ餓死せねばならぬ、自分共に取ってハ大打撃である。又学生ノ身で賄方ノ適当な女を見出すノハ困難ノことである。それをバーヤハ知りつゝ、かゝる弁解を以て暇を得んとすることハ自分には解し得られぬ所があるのだ。之が被雇者と雇者との面白さ、コンフリクトであらう。

併し柳川君ノ心配により一人ノ老婦を得られさうだ〔この行は墨引きで削除〕

記者附言 このことを茲に稍詳載したのはバーヤを咎めるためでもなく、バーヤを悪口するためでもない、只、此ノ寄宿舎ノ創立以來忠実に、又舎生よりバーヤ、バーヤと云はれて母ノ様に取り扱はれたバーヤノ一生ノ歴史ノ数頁ノ材料をも埋めることもあらんとノ老婆〔婆〕心より加えたのである。

補遺 バーヤノ此ノ要求に対し、如何なる処置を取るべきやと委員集つて相談した、何ノ条件もなくして之をバーヤに許すか、又或る条件のもとにバーヤノ帰省〔削除〕暇を中止せしむるか（バーヤノ此ノ要求に対してハ多くノ矛盾を見出すのである、如何に身体が弱ればとて夏休暇が眼ノ前に来てバーヤにとってハ身体を休めるに持つて来いノときである）ノ二つに結着する。我等ハ自分ノバーヤに対して別に不正といふのは一も見出さない、それゆへバーヤに対して讓歩する必要を見ない、逞〔飽〕くまで自分共ノ思ふ事を通さう、バーヤに暇をやつてバーヤに後任者を探さしめることに一決した。併し、バーヤにのみ探さしてハ物になりさうもないから又自分共も注意して探すことにした。

五月九日 農科大学第二十六回文武会遊戯会が開かれた。人出で山を築き中々盛大で終リノ北海道ノ中学程度ノ七中学ノ選手競争、各科選手競争ハ中々目ざましかりき、今年は予科が名誉ノ月桂冠ノ優勝旗を得た。そのときノ予科ノ健児二百余名ノ意気や他科生を圧して天を衝くものがあつたのである。

五月十日 朝、委員会があつてバーヤノ後任者として柳川君ノ尽力により適当な女が見出されたゆへそれを雇ふことに決す、その女ハ五十位で多少教育があるものだと云ふことだ。

五月十一日 農科大学ハ遊戯会ノ慰勞休日であつた。小春ノ晴れた上天気、円山ノ桜花も

■〔綻〕び始めて、昨日、今日ノ人出と云つたら盛んなものだ。

午後、その筋よりノ命令通り各室を畳をあげて大掃除をした。

五月十二日 柳川副舎長俱知安方面へ旅行せられたり。

五月十四日 柳川君帰舎せらる。

五月二十三日 月次会あり、宮部先生来らる、弁士ハ別宮君、田中君、杉本君、松本君〔削

除] 和田君、添田君で雄弁で中々振った。柳川君ハ順序と云ふことを語り、宮部先生ハ人生ハ活動である様な意味で有益なる御話をせられた。茶菓を喫する間、宮部先生ハ千島旅行当時の面白い話をして下さった。後で空気、水、陸と云ふゲームをやって十一時散会せり。

五月 一ヶ月許りの休養を頼みてその積りにしてあったバーヤは又此の企を中止した。仮に雇ったバーヤも二日居たばかりで知らぬ間に帰ってしまった。何だか此の間にハをかしい事のある様だ。けれども、バーヤがそのまゝ先の計画を撤去した以上ハ此方もバーヤをそのまゝにして元の通り何も云はず喜んで働かすことにした。茲に之を加へてをく。

五月二十六日 金子君野幌へ修学旅行へ行かれた。

五月二十八日 北海中学生永井栄太郎君入舎された。

金子君帰舎せらる。

会計決算をなす、食費は非常に安くて皆大喜びなり、一人一日二十銭八厘七毛の割に当る。

五月三十日 新妻退舎され、小樽中学校に転校せらる。

暗誦会あり、出席者少なし、演者田中君、和田君、丹治君、池上君、石津君なりき。

六月一日 新聞雑誌競売をなす。

万朝

北海タイムス

中学世界 七銭 丹治 ◎

六月三日 今度農科大学林学科、土木工学科を卒業せらるゝ松本君、近藤君の送別記念のため朝門前で宮部先生を迎へて一同撮影せり。

六月四日 白井七郎君より美麗なる篇〔扁〕額を我が舎に寄附せらる。

六月五日 新聞室に大きな紙に麗々しく書かれた舎則が張り出された。何が故なるかハ問ふ迄もないかも知れぬ。併し、わざわざあんなものが大袈裟に今頃張り出されるとハ少し合点が行かぬ。余りに因循な仕方に驚いた。

六月八日 松本君、自然と自然の神に接すべく約一週間の予定にて洞爺湖方面へ旅行せられたり。

此の二三日鬱陶しい天気だ。

六月十日 北海中学校二年生小川收君入舎す。

六月十一日 今朝添田君漂然樺太へ向け旅行を企つ。試験に真近になってをるのに中々奇抜だ。

六月十二日 太陽の光ハ美しく、又温かく照りぬ。緑葉薫るエルムの木陰なつかしく、夏も近くなりぬ。

此の大掃除したその大掃除が検査官のよってパスしなかつた。

六月十七日 永井君登別温泉場へ行く。

農科大学今日より試験で皆、内心恟々たり。

六月廿四日 近藤君今晚急に郷里に向け徴兵検査のため帰る。

長々、苦前にひっこんで居た三田村君帰って来た。

六月二十七日 松本、近藤両君ノ送別会ヲ兼ネテ月次会ヲ開ク。宮部先生、石沢前々副舎長態々多忙ノ時ヲ割キテ臨席セラレタリ。田中、丹治、池上君ノ演説、柳川副舎長ノ両君送別、及将来ニ対スル生活上ノ注意ニ関スル演説、松本君答辞、石沢氏ハ我舎ノ目的ヲ述ベラレ、更ニ両君ガ我舎ニ於テ養成セル良習慣ヲ何処マデモ継続セラレン事ヲ望ムレトノ主旨ニテ演説サセラレ、宮部舎長ハ石沢氏ノ主意ヲ更ニ委シク述ベラレ頗ル有益ナリキ。

正式終リテ例ノ如ク余興アリ、愉快ナル一夜ヲ送りタリキ

山田桂圃君本日午後二十分ノ汽車ニテ帰省セラル。

七月一日 暑中休暇中ニ於ケル委員左ノ如シ

会計及衛生委員 和田梓之助君

食事、文芸委員代理 柳川 秀興君

七月二日 舎生中村正寿君帰省ノ途ニ即ク

〃 田中貫一郎君モ亦郷里ニ向ッテ出発ス。

本日農科大学学年試業ノ成績表明セラル。

七月四日 農科大学卒業式ヲ挙行ス。舎生ニシテ本年度各科卒業ノ榮ヲ荷ハレタルハ左ノ如シ

工科卒業 近藤俊二郎君

林科卒業 松本純爾君

予科卒業 前川十郎君

〃 中村正寿君

〃 池上三次君

尚、和田梓之助君ハ前学年ト同ジク特待生トナラレタリ（午前五時二十分）

舎生小野崎浩三君及添田美胤君帰省。

舎生池上三次君モ同ジク午後帰国ノ途ニ即カル。

尚本日、田中貫一郎、中村正寿両君ヨリ、在舎生一同ニ対シ葉書到来、道中ノ無事ヲ報ゼラル。

丹治七郎君ハ畜産ニ関スル演習ノ為、真駒内ニ向ッテ出発セラル（夕方）

七月六日 在舎生ノ人々次第ニ帰国サレ、僅か二十二人トナリス、中学ニ通学ノ面々ハ日中ノ大部分ヲ学校ニテ送り、多少閑ヲ得タル農学生モ午前中ハ皆々自室ニ籠居シテ勉学ニ忙ガハシ。

昼食ヲ終ルヤ直チニ後庭ニテニスヲ試ム。少クモ一ケ年、多キハ数ケ年相見エザル両親  
ヲ故郷ニ帰リテ慰ムル事實ニ可ナリ、而シテ朝夕冷涼ナル此札幌ニ留マリテ奮励一番其  
欲スル所ヲ究メ、体ヲ鍛へ徐ロオニ修養ヲ計ル事豈父母ノ意ニ適セザランヤ。

或ハ読書、或ハ実験、或ハ採集、或ハ乗馬或ハテニス、一人トシテ無為ノ生活、亡国青  
年の生活ヲ為ス者無シ、賀スベキ至リナリ。

**“Seest thou a man diligent in his calling, he shall stand before kings, he shall not  
stand before mean miss[meanness?]” Solomon**

ソロモンノ訓クル勤勉ノ生活ハ今ヤ我舎ニ実現セラレツゝアリ。

金子貞治君沼田（妹背牛）方面ニ向ヒテ旅行ノ為出発、尚序ニ帰国サルゝ由、食事ハ明  
日限り。

七月七日（火） 本日夕食後新聞雑誌競売ヲ行フ

北海タイムス（七月分）七錢五厘別宮元君

万朝報（七月分）七錢角野輿一郎君

中学世界（六月十日発行）柳川秀興君

代金ハ何レモ受ケ取ラズ、受取りタル際ニハ文芸委員標印ヲ附スベシ〔中学世界の上欄  
外に「受取ル」とあり〕

七月九日（木） 去月十日以来尚未ダ雨ヲ見ズ、道路ノ塵埃輕キコト木灰ノ如ク風ニ舞ヒ  
高ク、少クモ百丈、行人頗ル煩フ。

前川十郎君今朝五時二十分ノ汽車ニテ函館ニ向フ、尚、暫時滞在ノ後、郷里根室ニ向ハ  
ルゝ由、吾等ハ君ガ健在ヲ望ム事切ナリ。

七月十日（金） 曲尾寅男君滝川ニ向ッテ出発セラル、食事ハ本日限り。

七月十二日（日） 丹治七郎君久シ振リニ昨夜帰舎セラレタリ、樂シキ日曜ノ一日ヲ札幌  
ニ送り本夕再ビ真駒内ニ向ハレタリ、昨夜来微雨頻リナリ。

七月十四日（火） 農科大学予科其他ノ入学試験ハ本日ヨリ開始、今日ハ数学ナリトゾ札幌  
中学第三年生南清吉君本日夕方入舎セラレタリ。愈明朝ヨリ我等ト食卓ヲ共ニスル筈、  
十二日以来ノ雨天ハ今日暫ラクノ間晴レ亘リテ後庭ニ愉快ナルテニス遊戯ヲ試ルヲ得タ  
リキ。

七月十七日（金） 丹治七郎君昨夜真駒内ヨリ帰舎セラル。

農科大学予科実科等〔削除〕ノ入学試験ハ本日ヲ以テ終了ス。

七月十八日（土） 農科大学実科ノ入学試験ハ本日ヲ以テ完了ス。

和田梓之助君ハ本日午前八時半過ノ汽車ニテ奈江井ニ向ヒ出発セラル。

本日ハ天気快晴ニシテ烟モ直上セシバカリナリキ、例ニ依テ「テニス」頗ル盛ニシテ六  
時間引続キノ快戦アリキ。

札幌中学校第一学期試験ハ本日ヨリ開始セラル。在舎ノ中学生諸君ハ別ニ取急グ有様モ  
見ヘズ、蓋閑日月ノ有ルニ依ルカ、記者ハ此ノ態度ヲ頗ル愛ス。

七月十九日（日） 丹治七郎君本日午後五時二十分ノ汽車ニテ故郷ニ向ハレタリ。

札幌中学校教諭神田勝次氏ハ同校生徒ノ日常生活ノ状況ヲ知ランガ為ニ例ニヨリテ我舎ヲ訪問シ、各生徒ノ自習室ヲモ一覽シテ帰ラレタリキ。

七月二十三日（木） 小川收君本日未明、江別ニ向ヒ帰省サレタリ。食事ハ二十二日限りナリ。

高木亮君石狩ニ向ヒ一泊旅行ヲ試ミントシテ今朝出立セラレタリ。

宮部先生ヨリ高木亮君ガ好成绩ヲ以テ入学許可トナリシ事ヲ通知セラレタリ。高木君自身ハ勿論舎生一同ノ喜び大ナルモノアリ。

七月二十四日（金） 高木亮君本日午後四時帰舎セラル。

七月二十五日（土） 月次例会ヲ開ク、宮部先生ハ入学試験委員長トシテ非常ニ多忙ナル為臨席セラレザリキ。

別宮元君開会ノ辞ヲ述べ、高木亮君ハ阿蘇登山ノ旅行談ヲナシ、次ニ松本純尔君ハ現在ニ於ケル日本ノ新聞雑誌ノ党利的ニシテ読ムニ足ル者少キヲ慨シ、次デ「青年ノ友」ハ比較的君ノ意ニ適スル旨ヲ述べラレタリ。

最後ニ柳川君ハ談ニツキ思ヒ浮ベテ愉快ナル事、及松本君ノ所謂現代新聞雑誌ニ対スル不平ヲ慰メテ、彼等ノ内ヨリ當〔栄〕養トナリ得ル部分ヲ吸収シテ修養ニ資スル事恰モ消化器ガ多量ノ食物中ヨリ純料〔良〕ノニューツリションヲ撰出スルニ例フヲ可トスル旨ヲ述べ、此休暇ヲ利用シテ大ニ読書ニ勉ムベク、而モ其書、先ヅ事實ヲ記載セル者ヲ撰ブベキ旨ヲ語ラレタリ。

是ヨリ茶菓ノ饗応アリ、殊ニ高木君ハ入学試験及第ノ祝トシテ氷等ノ寄贈アリ、一同非常ノ快ヲ尽シテ時ノ移ルヲ知ラズ、已ニ十二時半トナリテ漸ク閉会セリ、今日ノ会ノ出席者ハ室順ニヨレバ、柳川君、南君、角野君、和田君、三田村君、高木君、松本君、別宮君及、本間君ノ九名ナリ、奈江井ニ在リシ和田梓之助君ハ本日 十時過ニ帰舎セラレタリ。実ニ一同ニトリテ一層ノ愉快ヲ増セリ。

七月二十六日（日） 角野與一郎君、南清吉君ハ夫々砂川及滝川ニ向テ帰省ノ途ニ即カレタリ（午前九時過）

七月二十七日（月） 別宮、三田村、高木ノ三君ハマッカリヌプリ登山ノ目的ヲ以テ今朝五時出発セラレタリ（青年寄宿独特ノムスビ携待ノ上）

七月二十八日（火） マッカリヌプリ登山ヲ試ミタル別宮、三田村及高木ノ三君ハ今夕九時頃無事其目的ヲ全フシテ帰舎セラレタリ、別宮及高木ノ両君ハ種々妙ラシキ高山植物ヲ採集シテ来ラレタリ、今朝マデ蝦夷富士山頂ニ咲キシ植物ハ今ヤ已ニ札幌青年寄宿舎ノ一室ニ飾ラレツハアリ、此ヲ約三十年ノ昔ニ比スレバ其便不便ノ差如何バカリゾヤ、然リ世界ハ既ニ狭隘トナリツハアリ。

七月二十九日（水） 現在ニ於ケル在舎生左ノ如シ

柳川君

石津君、南君、小ノ崎君、角野君、前川君、小川君、和田君、三田村君、田中君、高木君、松本君、山田君、丹治君、金子君、中村君、曲尾君、永井君、池上君、別宮君、本



間君。

但、帰省セスシテ寄宿舍ニ研学シツ、アル者ハ左ノ七名ナリ。即、柳川君、和田君、別宮君、三田村君、松本君、高木君、本間君。

七月三十日（木） 今朝微雨ヲ見シモ暑気ハ全ク前日ニ異ナラズ、

七月分会計報告本日発表ス、米代及醤油代ニ於テ過度ノ高価ヲ示セリ、舎費ヨリ補助アリタル為、一日平均（一人）金貳拾参銭一厘五毛六糸ナリ。

七月三十一日（金） 我等農学生暑中休暇ヲ迎ヘテ已ニ四旬ニ充タントス、七月ハ已ニ今日ヲ以テ永遠ニ去ラントス、何ゾ夫レ光陰ノ經過スクノ如ク速ナルヤ、而レトモ、小児ハ常ニ正月ノ来ル事遠ク、御祭ノ日至ル事遅キヲ訴フ、蓋彼等ニ忙事無キニヨルカ。

世ノ日陰ノ經過速カナルヲ感ズル事多キ者ハ皆一定ノ職務ニ勤勉ナル者ナリ。

今日新聞雑誌（八月分）ノ競売ヲ行フ。買客ハ僅ニ四五名ノミ、一時間ヲ費シテ漸ク此ヲ終レリ。

北海タイムス 金七銭五厘也 高木亮君

万朝報 金六銭五厘也 高木亮君

中学世界 金三銭也 柳川秀興君

曲尾寅雄君昨夜十二時近キ頃、帰舎セラレ、我等ノ寂シカリシ生活ニ稍回復ノ度ヲ増セリ。

八月一日（土） 曲尾寅雄君、再滝川ニ向テ出立セラレタリ（前十時）

八月二日（日） 昨夜十時出発、銭函ニ向ケ夜行ヲ企テラレタル別宮元、三田村正孝、本間庄吉ノ三君ハ本日午後六時頃無事帰舎セラレタリ。柳川君モ今朝出発シ、三君ト共ニ帰ラレタリ。昨夜ハ実ニ遠友夜学校生徒ノ夜行軍ニテ我舎ヨリハ前記ノ諸君ガ同行セラレシナリ。

今日ハ陰曆七月六日ニテ兼行法師ノ「棚機祭るこそなまめかしけれ」ノ景ガ此札幌ニ尚見ラルハ面白シ。

八月三日（月） 久シク登別温泉ノ山深キ奥ニ静養シツ、アリシ永井君ハ本日午前九時頃無事帰舎、昼食ヲ終リテ後更ニ郷里ニ向テ出発セラレタリ（但、今夕ハ知人訪問）

八月五日（水） 角野與一郎君本日、前十一時過帰舎サレタリ、本間庄吉君ハ病氣ノ為入院セラル。

八月七日（金） 本日各室床下大掃除ヲ行フ、初、田面公曰ク斯カル室ヲ一々掃除スルニハ一日ヲ費ストモ僅ニ三、四室ヲ卒フル已ト、依テ試ニ業ニ当ラシメ、且之ヲ督励援助セリ、而シテ見ヨ！副舎長室、在舎生室、賄婦室ノ十五室ハ今日后五時迄ニ完全ニ掃除シ得タリ、残ス処ハ、廊下、新聞室、食堂ノ床下ナリ、此等ハ好天氣ヲ待チテ更ニ行ハントス。

本間君ハ前記ノ如ク不在トナリシ為、例年ノ如ク在舎生交互ニ便所及廊下ノ掃除ヲ行フ、但一週間ニ二回ニシテ一人一回宛ナリ、角野與一郎君近来非常ノ熱意ヲ以テヴィオリーネヲ練習セラレツ、アリ、来ラン初冬ノ記念会ニハ君ガ一曲ヲ望ム事切ナルモノアリ。

八月九日（日） 金子君昨日一応帰舎、今日帰国セラレタリ。但食事ハ昨今ヲ通ジテ昼食一回ノミ也。

八月十日（月） 本日ハ各室ノ大掃除ヲ行ヒタリ、天気非常ニ宜シク、曇ハ十分ニ乾燥シ頗ル衛生的トナレリ。

舎費ヨリ慰勞トシテ菓子ノ饗応アリ、一同新聞室ニ会シテ舎内ノ清潔ニナレルヲ喜ベリ。

八月十五日（土） 角野與一郎君本日前十時頃再帰省サレタリ。

八月二十日（木） 賄婦ハ臨時ニ二日間ノ休暇ヲ申出タル為、各自交代ニ舎生ノ自炊ヲ行フ事トセリ、本日ノ当番ハ柳川君、和田君、高木君、三田村君ノ四名ナリ。

柳川君ハ朝食ヲ担当、三田村君ハ昼食ナリ、君ノ煮ラレタル昼ノ菜物ハ実ニ淡白無邪氣ニシテ、而モ塩梅其度ヲ得タリ、夕食ニハ和田、高木両君ノ考案ニ懸ル西洋料理ニシテ、デッシュノ作り方ニ至ル迄頗付ノ物ナリキ、一同（七名）ハテーブルヲ囲シテ談笑ノ間ニ箸ヲトレリ、而テ箸ナリ、フォーク、ナイフハ無クトモ十分満足シ得タリキ、吾人ハ毎日ト云ハズ、唯、時々、此種ノ食事ヲ共ニシ、愉快ヲ樂シム機会ノ得ラレン事ヲ希望シテ止マザルモノナリ。

近来炎天打続キ室内九十度ニ昇ル事度々ナリ、吾人ハ着札以来本年初メテ夏ニ際会セル如キ感ニ打タレ愉快ナリキ、暑キ時ニハウント暑カレヨ、寒イ時ニハウント寒カレヨ、ドッチツカズノズルズルハ吾人ノ最モ好マヌ処ナリ。

八月二十一日（金） 本日ノ自炊当番トシテ第一別宮君ノ朝食、松本君ノ昼食、曲尾君ノ晚餐、何レモ奇抜ナリキ。

八月二十二日（土） 昨日帰ル筈ナリシ賄婦ハ本日ニ成リテモ尚、其影ヲ見セズ、柳川君ハ則、例ニ依リテ午前四時起床、賄委員トシテ米ヲ炊カレタリ、然ルニ随分軟カナル飯トナレリ、昼食ハ松本君、晩ハ和田君ナリキ。

八月二十三日（日） 賄婦依然として帰らず、依って今朝は松本君、三田村君が炊事をなせり。昼飯は高木君がする筈で準備をして居る処へ、賄婦がヒョックリ帰って来た、故に今日朝飯限り自炊生活は中止。

帰省中の田中君、山田君より来信、在舎生の安否を問ふ。

八月二十四日（月） 此頃は大分涼しくなった。之れで秋になった事も知れる。本日、柳川君と高木君は面白いスタイルで礼文島へ出発せられた。何にか研究せらるゝならん。

八月二十五日（月） 柳川君が国谷の御爺に牧草を刈る事を許した為めか、国谷より本日一升五合ばかりの牛乳を呉れた。

八月二十六日（水） 今日も一升五合ばかりの牛乳を呉れた。

仲村君帰舎せらる。甲府の名産、菓子月の雫を馳走せられた。非常にうまかった。柳川君、高木君より端書来る。

八月二十九日（土） 南野君帰舎す。八月分食料の決算が出来た。今月は比較的安かった。

委員の骨折りの儀多謝々々、今日の食料及び舎費と合して七円五十五銭であった。

八月卅日（日） 長らく我が舎に居って皆なの者より其の無邪氣な清き心を有せるを以て

愛されし三田村君は今年の農学校の入学試験に不幸失敗せられしを以て其の回復として試験準備のため本日午後五時廿分の汽車で東京へ向け出発せられた。吾人は君が我が舎を去らるゝのをいたく名ごりをしく思ふけれども君の一身上に関する事だからしいては言へぬ。唯、此の上は君の特性は増々発達せしめ、然る上に十分に勉強せられ、来年の試験に首尾好く、月桂冠を取られて再び我が舎の人となられん事を希望して已まざるなり。

八月卅一日（月） 小川君、南君帰舎せらる、両君とも何んだかうれしそうな顔付きをして居られた。長い暑中休暇の間御っかさんの御乳を沢山飲んでこられたのだらう。

中学生諸君は今日が暑中休暇の最終日だ。

色々面白い遊び、其の他の事をやられた事であらう。是れからは第二学期となるのだ、諸君は彼の最も普通なる言を借りて「よく学び、よく遊ぶ」と云ふ風にやられん事を希望す。

九月五日（土） 礼文島へ行かれて居った柳川君と高木君とは昨夜遅く帰られた。本間は病院に入院して居られたが、略ぼ全快せられたから今日帰舎せられた〔欄外に「九月五日の朝、小川君帰郷せらる」とあり〕

九月六日 今回農学校の土木工学科へ入学せられし小松原謙平君本日午前入舎せられ、差し当り石津君の室に於て起居せらるゝ事になれり、我等は今や一人の友を得るを無上に喜ぶものなり。

九月七日（月） 朝食後直ちに数名武者富貴堂に向って進む。何んの為めだと聞いて見たら、富貴堂は今日から新築の店で営業をするので今日と明日の二日間福引をするのぢやそうなる。皆なの者慾にはぬけ目なしだな。本日夕方予科に入学せられし丹部登君入舎せらる。

九月八日（火） 小松原君空知の知人の処へ行かる。夕方帰舎せらるゝ筈なりしが、帰られざりき。

暑中休暇中帰郷せられし田中君本日午後帰舎せらる。然しながら、已むを得ざる事故の為め夕方退舎せらる。前川君帰舎す。

九月九日（水） 小川君未だ帰舎せず、小松原君本日帰舎す、池上君本日午前十時帰舎せらる、相変らず面白そうに見える。久しぶりで本日湯がわく。

九月十日（木） 小川君退舎す。昨晚十二時過ぎ丹治君帰舎せらる。本日正午の汽車にて石津君、小野崎君帰舎せられたり、今度林学科へ入学せられし鈴木力蔵君入舎す。

今日は十五夜なれば、枝豆、トウキビの御馳走がありたり、然し実際の月は後れて上ぼった。今晚は月は清朗には見えなんだ、曇って居った。けれども之れが詩人にでも見せると中々面白い処であらう。農学校へ行く連中は八十日にもなる長い暑中休暇を持ったが、其れも夢の間に過ぎてトウトウ明日からは又々学校へ行く身となった。之れから燈火親む可き時だ。自ら勉強せざるを得ないのだ。ヤレヤレシッカリヤレ。今回水産科へ入学せられし、永嶺復五郎君本日入舎せり。

九月十一日（金） 午前八時半よりは、大学生諸君の始業式、同九時半よりは一般生徒諸君の始業式ありたり、今学期よりは、多くの有名なる学者で勉学する様になったから誠に農学校の幸福とす可き処である。

正午過ぎ山田君帰舎せられた。未だ帰舎せないのは金子貞二君のみだ。

九月十六日（水） 金子貞二君本日帰舎せらる、之れで皆な揃らうた、然し、二三人の空室がある。何れ遠からず充滿する事だらう。

九月十九日（土） 大学一年生の前川君と池上君は修学旅行の為め今朝五時の汽車で忍路の方面へ出発せられた。四日間の予定だそうなる。仲村君も行く筈である。少し御病気なものだから、行かずに家に居られる。

今夜、今回入学せられし諸君にて当舎に入られしもの及び新たに入舎せられし者の歓迎会兼月次会が開かれた。毎月次会の如く別に奇抜な事もなかつたが、さりとて甚だ淋しい事もなかつた。先づ程の好い処であつたと思ふ、先づ石津君が開会の辞を述べ、山田君は、一場の歓迎の辞、丹治君も歓迎の辞を述べられた。之れが済むと、高木君が新入生諸君の代表者として答辞を述べられた。其れから菓子及び林檎を食ひ、遊戯をして十時散会した。今夜は宮部舎長は御病気の為め来会せられなんだ。之れが今夜の最大遺憾とする処である。

今夜農学実科今度入学せられし三木寿生君及予科三年生森田健二郎君の二人入舎せらる。

委員改選ありたり、左の如し。

常務委員四名

石津君 丹治君

池上君 山田君

運動部委員 別宮君

九月二十二日（火） 修学旅行の為め忍路方面へ行かれし池上君と前川君と今日帰舎せられたり、種々の植物をして来られた。定めし面白い事が沢山あつたらう。

九月二十四日（木） 曲尾君岩見沢より旭川方面修学旅行の為め午前の汽車で一週間の予定で出発せられた。

九月二十五日（金） 岩見沢の農学校の教師となりて行かれし松本君は余暇を得て札幌に来られ、我が舎をも訪問して下され、舎生一同にれんがもちまんぢうの御土産を下さる。

松本君の新生活には色々面白いがあるであらう、聞きたいな。

九月二十六日 新学期の開始と共に寄宿舎の常務委員も亦、新に選挙せらる

会計委員 丹治 七郎君

衛生委員 石津 半治君

賄 委員 池上 三次君

運動部委員 別宮 元 君

文芸部委員 山田 桂輔

茲に不肖筆を取って文芸部委員の任に当らんとす。

九月廿七日 運動部秋季庭球大会を為す。集まるもの十七名、紅白二軍に分れて陣を取る。  
紅軍の御大将小野崎君、角野君、白軍の御大将中村君、和田君、今日の勝利は遂に紅軍  
の手に帰しぬ。紅軍に於て池上、三木両君は、共に優待の榮を得たり。  
予科一年生吉川留喜君入舎せらる。

十月二日 札幌中学第二年生渡辺正敏君本日入舎せらる。食事は今日より当舎より求めら  
る可し。

十月八日 石津、丹治、和田の三君本日修学旅行に趣かる。

十月九日 室替併びに秋気〔季〕大掃除を行ふ。  
石津、丹治、和田の三君帰舎せらる。

十月十日 池上君夜退舎せらる。

十月十二日 前川十郎君、賄委員に選ばれる。

十月廿二日 札中四年級生徒水野芳男君入舎せらる。

十月廿五日 本日月次会を開く、宮部先生、中学校長山田幸太郎氏歓迎の為め御出席あら  
ず、又石沢様も出張の為に珍しき事もなく、六時から十一時まで演説と話で暮らした  
が何時もに変わって面白かったのは、三分演説なるものやったので少しは面白かった。  
池上君は退舎せられ、別宮君は旅行の為に寄宿舎の花俳優も見えず、只見るものは中  
村君の大関の笑顔のみ。

十月廿六日 吉川君本日病気の為め、退舎せらる。

十月廿八日 農学実科第一年生篠塚栄治君入舎せらる。但し、食事は明日より。

十月三十日 前川十郎君本日退舎せらる。  
〔欄外に「十月三十一日 水野君帰省」とあり〕

十一月一日 第十週年紀念式を来十四日に行ふ事とす。  
丹治、石津、篠塚火鉢を使用す。  
曲尾、中村両君も亦本日より火鉢を使用す。

十一月六日 永峰君本日より炭を使用す。

十一月七日 小野崎君本日より炭を使用す。

十一月八日 水野君帰舎せらる、然し、食事は明日よりとす。

十一月九日 丹治君本日より火鉢を拝す。

十一月十一日 角野君明日より火鉢を拝し、水野君と同居することゝす。

十一月十二日 和田君本日より火鉢を使用す、南君別宮君交室す。

十一月十四日（土曜日） 第十回創立紀念式を挙行す。  
来賓 宮部先生、同令夫人、石沢君、吉川君、高松君、逢坂君、徳田君、朝倉君、田中  
君、鈴木君、齊藤君、上野君、田中稔君  
当日委員  
庶務委員 柳川君、山田  
接待委員 柳川君、石津君、山田

会場〃 丹治君、丹部君、三木君、篠塚君、高木君

賄 委員 中村君、和田君、別宮君、小野崎君、森田君、曲尾君

余興〃 金子君、永峰君、角野君、小松原君、等

〔欄外に「当日招待状発信者、宮部先生、同令夫人、石沢君、田中稔君、森本先生、高松君、田中元次郎君、徳田君、斉藤君、鈴木限三君、朝倉君、上野君、松本君、逢坂君、吉川君」とあり〕

会場 万国旗を飾り「祝紀念日」の大額を作り、椽を青松にて飾り、表面を粟にてぬり、字は小豆を以て記す。当日第一の見物なりし。

応接室 副舎長室、五号室、八号室を之れにあて各々個有の装飾を為す。

馳走 第一皿 鮭の塩焼、羊羹、味甘、きんとん

第二皿 オムレツ

第三皿 鶏及び牛蒡の甘煮

第四皿 吸物（鳥）

一人前代金四十銭～四十五銭

余興 蓄音機、バイオリン、福引、歌、詩吟、等 手品

開会時 六時、（実際の通信は四時半）

閉会 十時半

十一月十五日 別宮君、森田君退舎す

十一月十六日 林学科一年級和田丘君本日入舎、食事は明日より

十一月十七日 林学科一年級松本始四郎君入舎、食事は明日より

十一月十九日 工学科一年級内田口〔黍カ〕郎君入舎、食事は明日より

十一月廿九日 十一月食費、七円六十五銭、寄宿舍より補助十二円

十二月一日 和田君本日より炭を排す、山田炭を使用す。

十二月一日

北海タイムス 十一銭五厘 丹治君

万朝報 十二銭 小松原君

太陽（九月） 十五銭五厘 高木君

太陽（十一月） 十五銭 鈴木君

十二月二十一日 十二月月次会を開く

山田幸太郎中学校長の御臨席あり。

演説者 丹治、篠塚君

常務委員改選の結果

和田梓之助君

金子貞治君

高木 亮君

山田桂輔

十二月半ヶ月分朝日新聞七錢五厘にて内田に売渡す。

十二月十九日 角野、水野君帰省

十二月二十日 南君帰省

十二月二十一日 本年最終の月次会を開く。新に札幌中学に校長の職を取られたる山田幸太郎先生の臨席ありたり、氏は農学校の卒業生にして久しく中学に教鞭を取られたる人にして其能弁にして子供に教い悟すが如く喋々と弁ぜらる。

十二月廿六日 朝四時金子君旅行に出発す。

十二月廿七日 石津君退舎す。

十二月廿八日 久しく望みて苦心惨胆、漸く「オルガン」を求む。価参拾八円、内田君丹部君の奔走に依り椅子（価二円二十銭）を寄附せしむ。富貴堂の奮発之れより大なるものなかる可し。

十二月廿九日 「オルガン」に関する規則を定む。

設置室 新聞縦覧室

修繕 文芸部に属し、文芸部之れが任に当る。

借債 舎費より参拾八円借債に、雑収入より毎月六拾銭、文芸部より毎月壹円宛返済し、明治四十一年十二月より初まり、明治四十三年十一月迄に悉く返済するものとする。

使用時間 夕食後一時間、但し土、日曜日は一時間半とす。

山田氏再選にて委員たる可きも、引き続き二回以上に及ぶを以て前例に依り次点者小松原謙〔謙〕平君に譲る。

十二月卅一日 夕食後新聞雑誌の競売を行ふ、其の結果左の如し、但し、太陽は今月分新聞は来月分なり。

万朝	十四錢五厘	松本君
タイムス	九錢	小松原君
朝日	十七錢五厘	和田丘君
太陽	十八錢	鈴木君
代表的人物		三木君